

# シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅰ〕

村 上 吉 男

## ヴェーユの哲学とは何か（２）

筆者は今回、前号<sup>(1)</sup>で扱えなかった問題「〈知的能力（思惟）〉がなぜ〈労働の間接的な本質〉をあらわすか」<sup>(2)</sup>にまず答え、そのうえでヴェーユが实在論者にも観念論者にもなり得ないことを最終的に言明し、もって小見出しの「ヴェーユの哲学とは何か」に結語するとともに、そこからマルクスの語った思想に付加すべきことがないかを探してみる。

前段の、最初の問いと、ヴェーユの哲学を实在論や観念論のいずれにも捉えてならないことを筆者なりの見方で解くには、これまで何度か取り上げおいた〈思惟と行動〉という語句がそこにかかわってこなければならなくなる。この語句は学士論文（1930年）後の、一に、1934年の『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』中に、また一に、同年の『一女生徒への手紙』中に各明確に記される。以下に掲げる引用文がそれである。

La liberté véritable ne se définit pas par un rapport entre le désir et la satisfaction, mais par un rapport entre la pensée et l'action. <sup>(3)</sup>

真の自由は欲求と充足との関係によってではなく、思惟と行動との関係によって定義される。

Ce que nous savons d'avance, c'est que la vie sera d'autant moins inhumaine que la capacité individuelle de penser et d'agir sera plus grande. <sup>(4)</sup>

わたしたちが（前記して）すでに知っていることは、個人の思惟と行動との能力が一層大きければ、それだけ個人の生（活）は非人間的にはならないであろう、ということである。（括弧内は筆者）

La réalité de la vie, ce n'est pas la sensation, c'est l'activité — j'entends l'activité et dans la pensée et dans l'action. Ceux qui vivent de sensations ne sont, matériellement et moralement, que des parasites par rapport aux hommes travailleurs et créateurs, qui seuls sont des hommes. <sup>(5)</sup>

生の現実は感覚ではなく、活動である。—— わたしは活動を思惟と行動とにおいて理解している。感覚によって生きる人たちは、よく労働し、よく創造（思惟）する人間たちと比べて、物質的にも精神的にも寄生生物でしかなくなる。よく労働し、よく創造（思惟）する人間たちだけが人間たちなのである。（括弧内は筆者）

三番目の引用文で、ヴェーユが〈感覚によって生きる人たち〉の例に、アンドレ・ジイド<sup>(6)</sup>を取り上げ、そこに語られたような人として記するのであれば、筆者はこれ以上、彼を代表させ語られる〈感覚〉について付加したり、確認したりはしなくてよからうが、彼さえ持ち出す、この批評からも、〈感覚〉がどれほど彼女に忌み嫌われていたことが明らかになる。たとえば彼女は、デカルトが〈感覚〉の取り入れを拒否した、かの〈真理の探求〉の認識論に倣って、〈感覚〉の活用を否定していたといわないまでも、〈現実〉の〈生〉を〈感覚〉を支えに生きるは〈人間〉たらしめないとの確信から、〈感覚〉を忌避すべき能力とみなすほかなかった、要は自らの認識論の形成にあって、〈感覚〉を不可欠な能力とは捉えなかったということである。とどのつまり彼女が〈感覚〉の受容を〈âme（魂）〉に認めたとしても、〈感覚〉は彼女にとって〈人間〉たるべきことに関係せず、無用な能力と理解される以上、〈魂〉に取り入れられようが、ほったらかしのまま捨ておかれる能力であったのである。だからか、この〈感覚〉に取って代えられるのが〈思惟と行動〉であったりしたわけである。

それでも問題は〈思惟と行動〉に、〈感覚〉のごとき受容能力が現出するといえたかにある。しかりと答える。それはヴェーユが〈感覚〉以外にいう、この〈思惟と行動〉に受容能力を確認せずして、彼女は〈世界を知覚すること〉<sup>(7)</sup>も、また自らの認識論の完成すら不可能にさせてしまうからである。例の〈感受性〉が〈世界〉との接触を、自らの認識論の成立を可能にした。だから筆者は、彼女が〈感受性〉を〈人間〉に欠かしてならない、もうひとつの受容能力とみなし、さらにこの〈感受性〉を、上記引用の論稿や手紙に各〈思惟と行動〉と記されたうちの〈行動〉の語にいい換えさせたと語るならば、学士論文以来の彼女の〈感受性〉なる主張はこの論稿や手紙の書かれた時期も継続されていたことが明らかになろうと指摘できる。さすれば〈行動〉が〈感受性〉と関係する語になり得るか、筆者はそのところを今一度以下で簡単に振り返り、確かめておかねばならなくなる。

〈行動〉が〈感受性〉に換言されるとみえるは次のような次第によっている。まず〈行動 (action)〉が〈能動〉、〈運動〉や〈労働〉の各語に置換され、ほぼ同意になるのであり、筆者をして〈行動〉を「動の行動」と記させることに、次に「動の行動」は、前回到少しく触れ、今回こそ後段以降で明かさねばなるまい〈思惟する〉が〈精神 (esprit)〉での〈能動〉作用とみるのに比べれば、もっぱら身体での〈行動〉、〈能動〉、〈運動〉や〈労働〉をさすにはかならないことに、そして身体が〈自然 (世界や社会)〉に向け動く〈働きかける〉かぎり、身体の〈能動〉的能力〈ressentir (感じる)〉が発揮されずにおれなくなり、しかしてその〈能動〉から生じてこよう〈受動〉たる能力〈感受性 (sensibilité)〉が〈自然の必然性 (不幸や美)〉をそのまま映し取る〈感受性〉として、身体に受け入れられることにあった。以上が〈行動〉を〈感受性〉に換言し得る証左である。むろん〈不幸〉や〈美〉との、ヴェーユ (人間) の判断は上記した、彼女 (人間) の〈âme (魂)〉にでなしに、〈esprit (精神)〉に、その〈知性〉で〈思惟する〉作用による以外にないといえるにしろ、それでも〈行動〉の語が身体とその〈感受性〉の各語にかかわると捉えられずには、〈行動〉もまた〈思惟する精神〉に基づく、この〈能動〉という〈行動〉の意味だけにとどまらねなくなるのである。

筆者は〈思惟と行動〉の、一方の〈行動〉を上記で「動の行動」と置き換えたのと同じく、他方の〈思惟〉をば「静の行動」にかかわるということができた。「動の行動」での換言に倣い、「静の行動」の「行動」にもまた〈能動〉、〈運動〉や〈労働〉の各語を宛がわせる補いが、だから〈思惟〉はこの「静の行動」によって生み出される受容（受動）能力とみることが可能になる。さも無いと各「行動」の謂をいい当てぬことになる。だが読書を例にいえば、読書は〈感覚〉器官を伸介させようとも、その中味が〈思惟〉されるのはたとえば〈思惟（理解）する〉などの〈能動〉能力の働きによるのだから、その〈理解する〉などの「静の行動」は「動の行動」と相違して、精神（脳）内の〈思惟する〉〈能動〉を示唆させるにすぎないのであって、脳以外の身体（五官や内臓）を動かす〈運動（労働）〉に相当することはない。要は「静の行動」たる〈能動〉を起すばかりか、五官や内臓とは異なる身体とみてよい脳（の一部）がヴェューユに精神と捉えられようが、それでも「静の行動」からもたらされる〈思惟〉は身体（五官や内臓と脳）にも関係してこないと指摘しておく必要がある。

そこで、上記二段落からさらなる疑問となって浮かび出る一に、〈思惟〉は〈âme（魂）〉のでなしに、何ゆえ〈esprit（精神）〉の能力にみられるかを、一に〈思惟〉が〈脳〉以外に無関係なのはなぜかを、また一に、ヴェューユにとって〈思惟〉の役割は何かを探る必要があるが、その前に筆者には、各段落に述べた「動の行動」と「静の行動」という表現をして、それぞれ身体と〈思惟〉とに適合せしめ得るかを証明することが課せられてくる。すでに一見したように、〈思惟と行動〉の〈行動〉の語を〈思惟〉や〈行動〉の各本分とし、すなわち〈思惟〉に関する〈思惟する〉は〈精神〉の、〈行動〉は身体各〈行動（能動）〉とし、おのおののところで各働きかけを捉えて、順次「静の行動」や「動の行動」に置換させた、この主張が筆者に成り立たせるは、実に、彼女が〈… 思惟と身体とのあらゆる能力を行動に移すことなしに、何ものも獲得し得ない…〉<sup>(8)</sup>と語ることを証左にする。〈行動に移す〉はもとより、この語句中の〈思惟と身体と〉に各〈行動〉を伴わせること、換言すると〈思惟と行動〉の前者では〈精神〉（内）で、後者では〈身体〉（内）で各〈能動〉を可能にすることであるほかなく、筆者はその違いを明示さすべく、〈精神〉または〈身体〉を

各動かす〈行動〉に「静」や「動」を修飾させたわけである。

しかも前記註(4)での語句〈個人の思惟と行動との能力〉の訳語〈能力〉と、註(8)での語句〈思惟と身体とのあらゆる能力〉の訳語〈能力〉がそれぞれ〈capacité〉や〈puissance〉の表記で異なるにしろ、両方をまさに〈個人〉の有する〈思惟〉と〈身体〉の能力にさせるとみなすかぎり、たとえば〈思惟〉にかかわる〈精神〉では〈理解する〉、〈判断する〉や〈意志する〉などが、〈行動(身体)〉では〈感覚〉や〈感受性〉を生み出す各〈感じる〉が〈あらゆる能力〉の一一に数えられてくる。だから〈思惟と行動〉という各語に当てはめて、「静の行動」と「動の行動」とした各〈行動〉はこれらの能力が〈能動〉、〈運動〉や〈労働〉として発揮することと同じになるのであり、いずれの〈行動〉もともに実現されることこそ、筆者には〈活動(activité)〉の真意にちがいないと察知できるのである。なぜならヴェーユは、〈思惟と行動との関係〉による〈活動〉なくば、〈非人間的にはならない〉で済む〈真の自由〉を〈獲得し得ない〉であろうと、またこの〈活動〉を〈生の現実〉に役立たせ得なくば、〈生の現実〉に取り残される〈個人〉の〈能力〉は、彼女にとって拒まれるべき〈感覚〉だけになろうし、そのうえ〈感覚によって生きる人〉は〈生の現実〉を〈欲求と充足との関係〉以外に〈感じ〉取ろうとせず、かつこうした〈関係〉からの〈受容(受動)〉された〈感覚〉に、自らを〈物質(身体)的にも精神的にも寄生物でしかなくなる〉ように委ねる以外にならうといえたからである。

### ヴェーユにみる、〈知性(悟性や理性)〉の〈能動〉能力〈思惟する〉や〈思惟する〉からもたらされる〈思惟〉たる〈受動〉能力について

前段で「〈思惟と行動との関係〉による〈活動〉」と記しおいたなかで、筆者がこれから直ちに質さねばならぬは、ヴェーユの語る〈思惟〉についてである。すでに上記語句中の〈行動〉を分析した<sup>(9)</sup> 筆者が他方にいう〈思惟〉を明るみに出さずに、これらをかかわらせていえよう〈活動〉の真意さえ確かめられなくなる。そこで〈思惟〉を解明すべく、筆者は既出引用文<sup>(10)</sup>での語句を再度持ち出し、その検討からはじめることにする(これはすなわち二段落前に、「さら

なる疑問」という記述への解答に取りかかることでもある)。

筆者がその既出引用文から受け取るに、まずヴェユが〈ほかの人体〉すなわち〈非感受性的人体〉<sup>(11)</sup>と表現した人体は〈思惟(静の行動)〉に関与する人体であると、そして〈その人体〉と訳した人体こそ彼女の主張する〈人体〉、要は〈非感受性的人体〉と〈感受性(動の行動)〉にかかわる人体とを織り込んだ〈人体〉であると。するとここから、〈人体(corps humains)〉とは、〈思惟と行動との関係〉を有する、さらに〈思惟〉を〈精神〉から、〈感受性〉を〈身体〉から各生み出させる〈受動〉能力とみることもできては、〈精神と身体との関係〉を有する人体と捉えてかまわぬであろう。ところが筆者は今換言したばかりの〈精神〉を一方で、〈わたし〉と身体の〈感受性〉とのかかわりから、〈魂(âme)〉とし、人体が〈魂と身体との関係〉で語られねばならぬのであれば、〈精神と身体との関係〉とした表記の〈精神(esprit)〉とは何かを検証する必要がある。だがこの試みは〈思惟〉を明確にしたうえで可能になるはずである。

だが筆者は既出引用文で取り残された問題を先きに片付け、そこに関与しよう内容から、〈思惟〉ならびに〈精神〉が何かに答えることにする。その残余とは一に、〈ほかの人体〉が〈感受性と労働との混合によって、労働に固有である〉ということに生じる疑問である。上記引用語句の二箇所〈労働〉の訳語を不断用いられる「仕事」と同義に捉えてよからうが、しかしこの訳よりか、筆者は〈ほかの人体〉たる〈思惟〉のかかわる人体にあって、〈労働〉をば〈思惟〉をもたらさずにいない、〈理解する〉や〈意志する〉などの〈能動〉に換言させて受け取らねばならないのではないかと推察し得るのである。なぜなら最初の語〈travail〉の訳語〈労働〉も「仕事」にみなされると、〈感受性〉と〈労働(仕事)〉の各語が並んだだけでは等位の配置にならないからして、筆者は最初の訳語〈労働〉を〈感受性〉を生み出す〈感じる〉の〈能動〉に置換させなければならぬし、そうみることではじめて、〈能動(労働)〉は〈受動(感受性)〉と〈同一のことがら〉すなわち〈混合〉の意味にふさわしい訳語となつて、一方の〈感受性〉との結合をみるべく配置されるのであり、〈思惟(受動)〉にかかわる、〈ほかの人体〉の場合での〈労働(能動)〉すら上記と同様でなければならぬと断じ得るからである。およそ〈労働〉が「仕事」のではなく、〈能動〉

の意を有せず、〈ほかの人体〉たる〈思惟〉は〈労働（能動）に固有である〉ことにならない。〈思惟〉に〈固有〉にかかわるはこの〈能動〉を措いてないし、これなくば、彼女にあっても〈同一のことがら〉としての〈受動（思惟）〉はもたらされてこない。だから彼女は〈知的能力（思惟）〉が〈労働の間接的な本質を完全に象徴する〉と語っていたわけである。

だがそこでまた、〈知的能力（思惟）〉はなぜ〈労働の間接的な本質〉とみられるかが疑問の一に浮かび出る。〈労働〉の語を例の〈能動〉と換言し受け取る場合、〈つねにわたしが欲する（vouloir）〉が〈つねに〉でなしに、〈ときおり〉にしか可能にさせられないのは〈妨害〉に出会ったからだとする筆者にとって、〈知性〉による〈欲する〉などの〈能動〉の作用で〈思惟（受動）〉がもたらされるといっても、〈思惟（受動）〉はその〈能動〉とのかわりて〈妨害〉を介在させては、〈能動〉通りの〈心象〉を映し出さぬ以上、〈労働〉からの〈知的能力（思惟）〉はそれ自身、当の〈受動〉までを伴わせた、いわば直接的な〈本質〉をさし示すのではなく、〈能動（労働）〉だけの〈間接的な本質〉をあらわすほかないと断じられる。

しかし人が〈travail〉の訳語を「仕事」以外に認めぬと語るならば、「仕事」はそれでも前段での、〈思惟する〉〈知的能力（能動）〉に依った、いわば頭脳（精神的）〈労働（仕事）〉にかざられてくるし、〈思惟する〉が〈妨害〉に出会い、その〈能動〉通りの〈思惟（受動）〉にならぬことと同様、この「仕事」も〈思惟〉をもたらず〈能動〉を伴わせるからして、〈能動〉のみにて〈つねに〉完璧に処理されることはないであろう。ところが〈travail〉を「仕事」の訳語に見立てた際の、肉体（身体的）〈労働（仕事）〉は、主に頭脳を働かせる精神的〈労働（仕事）〉とは異なりをみせるにちがいない。肉体（身体的）〈労働〉はもとより、身体を動かす〈能動〉なくして、「仕事」にならない。さすれば身体が働きかけて可能になろう〈労働〉には、この動きたる〈能動〉の——で「仕事」を完成に導いたりするのだから、「仕事」の前に〈能動〉の語がくる換言が適當するとみえる。そう捉えないと、ヴェーユがここでは〈感じる〉をさす、身体の〈能動〉からもたらされる〈受動（感受性）〉について主張する、かつ筆者が〈感受性〉を取り上げる必要さえなくなる。換言すると、彼女が身体



を動かし（感じ）たうえで生じる〈感受性〉を見届けずに、この〈受動〉が〈わたしはわたしの身体構造に妨害される〉因となる、こうした文章を記述し残すことはない、とどのつまり、彼女が〈思惟と行動〉を取り上げ論ずることは必要ないということである。

だがそう速断してはならない。ヴェーユにあって筆者のいう、「静の行動（思惟する）」から、また「動の行動（感じる）」から各生み出される〈思惟と感受性〉なしに、彼女が展開しよう〈認識論〉は語られはしなかった。しかも「静の行動」の方は〈思惟する〉が頭脳（精神的〈労働（仕事）〉のみをさして成るのだから、たとえば他の既出引用文〈身体（そのもの）は労働にとって無くてかまわぬものである〉<sup>(12)</sup>に窺える〈労働〉をこの頭脳（精神的〈労働（仕事）〉として受け取り、かつ〈能動〉にいい換え得るのであって、そのとき〈労働（仕事）〉すなわち〈能動（思惟する）〉は〈脳〉以外の〈身体〉を出所にしない、つまりこの〈思惟〉たる〈受動〉を脳を含む〈身体〉に生じさせないと指摘した通り、または上記引用文通り、〈身体（そのもの）〉にかかわらなくなるわけである。要はこれもすでに筆者をして、その〈能動（思惟する）〉は〈精神（わたし）〉にかかわると触れさせたことだからである。

この〈わたし〉にはさらに、身体を動かす〈行動（動の行動）〉からもたらされる、身体の〈感受性〉が伝えられてくる。その際上記引用文での例の語〈労働（仕事）〉はここにあっては、〈能動（感じる）〉といい換えられ、この〈感じる〉の発揮をば身体の動きに等しくなると知らされるのだから、身体の〈感受性〉を生み出す〈労働（能動）〉は、たとえば「自律神経系」を中心とした〈身体構造〉の不断の〈運動〉をする身体や、〈運動〉しない（静止している）身体を〈身体（そのもの）〉と捉える場合に比べ、各身体の〈運動〉とは別の〈運動〉になるとみなさざるを得ないし、この身体を動かす、別の〈運動〉たる〈感じる〉自身を〈身体（そのもの）〉の範疇に与させることがもはやできなくなる。したがって身体が動くが同時に生じよう、身体的能力〈感じる〉という〈能動（労働）〉にとって、〈思惟する〉〈能動〉と同様に、〈身体（そのもの）〉は...無くてかまわぬことになる。だからかの不断の〈運動〉をさす〈身体（そのもの）〉の〈能動〉ではなく、身体が動くや否や〈感じる〉能力としての



〈能動〉すなわち〈思惟と行動〉の〈行動（能動）〉もまた、〈わたし（魂）〉に関係させられる。なぜならこの〈行動（能動）〉はそこから生み出された、身体の〈感受性〉を〈わたし（魂）〉に伝えずにおれなくなるからである（なお〈わたし〉をここでは〈魂〉と表現したり、身体の〈感受性〉が何ゆえ〈魂〉にかかわったりするとみるかの証明は次号に譲ることにする）。

さて今度は〈思惟と行動〉との〈関係〉をみる際に、ヴェーユの〈認識論〉では、両者がいかに扱われるかが質される。〈思惟と行動〉をそれぞれ、〈思惟（受動）〉をもたらず〈能動（思惟する）〉と、〈感受性（受動）〉を生み出す〈能動（感じる）〉とに捉えた筆者にとって、両者の〈関係〉には「世界」に向けて、たとえば身体を動かし（移動させ）ながら、〈思惟する〉という、各〈能動〉が同時に働きかける場合もあると想定されるが、それでも熟慮した〈思惟〉を課し見出すために、身体の動きを中断させるが普通であろう（〈思惟〉しつつ、これによって〈行動〉する場合も想定されるが、その〈関係〉は上記の例と同様であるとみる）。すると彼女も〈思惟〉を優位にさすべき〈関係〉を主張するのか。否である。このことはすでに取り上げおいた、学士論文からの引用文に説かれているし、とりわけ女工体験で彼女に確認されていたことである。筆者が補足し再度用いる、その引用文は、すなわち〈思惟〉をもたらず〈ほかの人体〉が〈感受性と労働（感受性を引き出す能動）との混合によって、労働（思惟を引き出す能動）に固有であるというこのことのみを保持（する）〉<sup>(13)</sup>とされた文章は、〈感受性（受動）〉とこの〈労働（能動）〉との〈混合〉の方が〈思惟〉よりも先きを実現されていなくてはならない、〈思惟〉との〈関係〉を、かつこの〈混合〉に基いてはじめて、〈思惟（受動）〉がこれを引き出す〈労働（能動）に固有である〉、自らの〈関係〉さえ意味させるのだから、〈思惟と行動との関係〉にあっては、〈行動（感受性を引き出すうえでの感じる）〉という〈能動（運動や労働）〉の働きかけが優先されると読まれねばならなくなる。換言すると「動の行動」なしの「静の行動」は「世界」を確かめることができないということだ。

そのうえヴェーユ自身も、学士論文に書き留めた以外の、〈感受性〉を生み出す〈行動（能動）〉の働きが〈思惟（する）〉に実際先行される事実（現実）に、

しかも〈思惟と行動との関係〉すら完全に崩壊する現実に立ち会っていた。それはいわずと知れたこと、彼女が女工としての、かの〈極度の不幸〉の要因を形成する〈魂の破壊〉すなわち〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉たる体験（現実）であり、現実（世界）が彼女に〈思惟する〉「静の行動」を拒絶させたことにあった。その原因たるや、「動の行動」からの、〈わたし〉に伝達される、身体の〈感受性〉が〈思惟する〉を拒ませるほどの、〈わたし（魂）〉の〈感受性〉であった。だからここから、この〈感受性〉こそ学士論文に隠された、自らの〈認識論〉の「認識の起こり」の能力であることが、また〈思惟（する）〉に対し先んじた〈行動〉の能力になっていなければならぬ、〈思惟〉との〈関係〉にあることが証される。そしてその〈認識論〉は〈思惟〉や〈感覚〉をでなしに、〈感受性〉を基軸に確立された、彼女にとって終生不変不動の哲学的思想であったと認めおく必要がある。たとえ人が次のようにいうにしてもである。つまり彼女は〈魂の破壊〉を体験しては、〈思惟と行動との関係〉に依って立つ〈認識論〉を再考すべく追い込まれたにちがいないと。

だがヴェューグが自らの〈認識論〉を再考したか、そうした時間を持ち合わせたか否かは問題ではない。なぜなら、学士論文に語られていた〈思惟〉と〈感受性〉の〈関係〉から、工場体験でその〈思惟〉が〈逃亡〉したとされるにしろ、〈思惟の逃亡〉は「動の行動」で生じる〈感受性〉が彼女たる〈わたし（魂）〉に受け入れられたればこそ、〈わたし（精神）〉の「静の行動（思惟する）」を不可能にさせた結果にすぎないのであり、〈思惟の逃亡〉によって、〈思惟と行動との関係〉からする、彼女の〈認識論〉を変更するに及ばないどころか、むしろ学士論文で彼女なりに主張した、その正当さを証明する以外にないと思えるからである。学士論文での、彼女の〈認識論〉は一に、すでに触れた記述<sup>(14)</sup>で知るように、〈行動〉よりもたらされる〈感受性〉を基本にすると、そして一に、これも再度いうように、かの〈理解する〉などを〈知性〉でもって発揮させよう〈思惟する〉〈能動〉がその当初の〈能動〉にて対象を実証せんとするにもかわらず、たとえば〈意志（欲）する〉からの、この〈能動〉に相当しよう〈思惟（受動）〉を〈つねに〉生み出しはしないために、〈同一のことがら〉としての〈受動〉を見出すべく、何度も対象に働きかけねばならぬ、不確かな

能力でしかないという主張にあった。筆者は、〈思惟（する）〉または〈知性〉が何ゆえ不確かな能力となるかをのちに語るとして、ここでは彼女の〈認識論〉が究極には〈感受性〉だけで成り立つと断じ得ることを付記しておく。

ところで、ヴェーユが工場体験直前に出したともされる、例の『一女生徒への手紙』<sup>(15)</sup>中の〈思惟と行動〉は筆者には、彼女が未来ある女生徒の、あるべき〈活動〉を示しおかねばならないと察知されただけに、両者のいずれにも偏らず、等しく働きかけ合う〈関係〉を保たさせずにおかないと読み取れる。これこそヴェーユのいう〈活動〉の真意であろう。つまり〈活動〉は、〈わたし（魂）〉が何より〈行動（能動）〉から身体の〈感受性〉を受け入れて、その〈感受性〉に、〈わたし（精神）〉が〈思惟（受動）〉を見出すべく、〈思惟する（能動）〉を働かすことにあった。これがまた、概略的に語り得よう、彼女のいう〈認識論〉になる。しかし繰返してでもいうが、工場体験はいわば理想としていた〈認識論〉すなわち〈活動（思惟と行動）〉を、わけても〈思惟（する）〉を現実にさせてはくれなかったのである。

これは事実がちがいなかろうが、それでも筆者は、〈思惟する（能動）〉が不可能になることは、ヴェーユがその〈思惟（受動）〉たる〈同一のことがら〉を即座に生み出せぬとしたことをもってか、学士論文で〈思惟（知性）〉を不確かな能力と表現すると先きに推察し得たがゆえに、そこにすでに予告されていたことであるとみる。要は彼女が女工となり、〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉に襲われた体験ではじめて、〈思惟〉できないことに気づかされたのではない。だから筆者がここで知るべきは、彼女が工場体験で〈思惟〉し得ない状況に追い込まれるにあって、彼女に、これをも〈必然性〉と覚知せしめたばかりか、そのことで学士論文に質していた〈思惟（知性）〉の、いわば限界<sup>(16)</sup>を確認させたことにある。

しからば〈思惟（する）〉が不可能であったり、〈逃亡〉したりしてかまわぬとされる思想（哲学）上の理由とは何かである。筆者が推察するに、それは何よりもまず、〈思惟の逃亡〉が現実であるとき、〈魂〉（の〈感受性〉）は〈超越的な領域〉をめざしているのであり、そうしたなかにおいて、〈思惟（知性）〉は、ヴェーユが〈知性はいかなるときも奥義に入り込め得ない〉<sup>(17)</sup>と断じるま

でもなく、しかも事実〈逃亡〉しているのだから、〈超越的な領域（奥義）〉に対して役立つ能力ではないといわねばならぬからである。

そして、ヴェーユが〈思惟と行動〉のことを声高に主張したと筆者に肯定できても、しかし〈思惟〉に関する〈精神〉と、〈行動〉に関する身体とのままでは、両者は直接結びつく〈関係〉に至らないといえるからである。〈思惟と行動と〉の、すなわち〈精神（魂）〉と身体との〈関係〉では、彼女の工場体験のように、〈感じる〉身体が〈思惟する〉精神を〈逃亡（妨害）〉させてはじめて、魂と身体が合一するとみなされる（〈精神（魂）〉との表記は後記の通り、〈思惟の逃亡〉により、魂の語に入れ替えられることを示す）が、これなしには当然、精神と身体は二極（元）のままの〈関係〉を保持し続けるだけになる。だからといって、両者が結合しようとする〈関係〉は、〈思惟（精神）〉側から身体に働きかける〈関係〉で成るのではない。つまり筆者は、彼女が〈思惟の逃亡〉を体験せずとも、〈思惟する〉はこの〈能動〉による〈思惟（受動）〉をして身体に〈関係〉せしめないと断じていたことを、学士論文での既出引用文や他の作品で証明することができる。とまれ彼女が精神に関する〈思惟〉と、身体に関する〈行動〉の両者を持ち出し、〈関係〉させると説くからして、この〈関係〉が否定される事態は少なくとも、両者の提起自体を〈矛盾〉に陥れてしまう。したがって、身体からのかかわりで、一方の〈思惟〉が〈逃亡〉するにせよ、そこには、両者のこうした〈関係〉が見受けられると捉えなければならず、もはや身体（感受性）の〈魂〉への結合による〈関係〉以外に何も見出せなくなるのである。

同時に〈思惟〉の方はその〈逃亡〉のことはともかく、ヴェーユに不確かな能力と語らせては、〈思惟〉を発揮させる〈知性〉あるいは〈理性〉は第二義的能力になるほかないと察知される。だからかのデカルトもまた〈思惟する（能動）〉〈知性〉が何らかの対象に対する〈同一のことがら（受動）〉たる〈思惟〉を即座にもたらしはしないとみたからこそ、彼はたとえば〈四つの規則〉を打ち出し、その順序に従って、自らの認識を確実にさせたのではないか。わけても〈感覚〉を拒絶する〈真理の探求〉において、彼は〈知性〉からの〈思惟する〉により、対象への「認識の起こり」を可能にし、〈四つの規則〉に基づき、

なおも〈理性〉の〈意志する〉により、正しく肯定や否定の判断をし、そのうえで〈行動〉することを強調した。とどのつまり彼は彼女と相違して、〈思惟〉から〈行動〉への〈関係〉を選択したというわけである。だから、現に〈思惟の逃亡〉に出会った彼女にとって、学士論文で問うた、彼のいう《コギト（わたしは思惟する）》は〈行動〉より先行することがないどころか、〈思惟（する）〉が〈わたしの存在〉なる《スム（わたしは存在する）》にかかわることもない、要は〈わたし〉が〈思惟〉し〈存在する〉のではないとみておかねばならなくなる。

ヴェーユにあっても、〈知性〉による〈思惟（する）〉は〈わたし（魂）〉の能力である。筆者はこの〈思惟する〉を〈能動〉能力とみなし、「静の行動」と換言してきた。彼女は〈思惟する（静の行動）〉で、自らの思想を、たとえば〈認識論〉を組み立て、覚えとして書き留め、その論陣を張ることを、また古今東西の諸思想を読み、思い巡らすことを可能にさせた。そのみか、これらに伴う、彼女の〈身体構造〉の動きである視線、手振り身振りも、筆者にすれば「静の行動」に含ませ得よう。しかしその〈思惟する〉〈能動〉が対象に働きかけずば、もとより〈思惟〉は生み出されはしないし、生み出されたにせよ、複数の答えを同時にもたらさない。対象に対して、順次一つの〈思惟〉を引き出し、分析、検証しながら、一つの答えが導き出されるほかなかろう。こうした「静の行動」は彼女（人間）にとって、不断の〈必然性〉に従うことを語らせるが、しかし身体全体をあたかも動かさざるを得なくする「動の行動」と区別される。

すると〈思惟する（静の行動）〉に関するであろう、例の〈思惟の逃亡〉とは何かを今一度確かめおく必要がある。〈思惟の逃亡〉は、〈思惟する〉働きが不可能となる〈わたし〉の状態をさすのだから、産出された〈思惟（受動）〉が〈逃亡〉するという意味にならないとともに、〈逃亡〉する〈わたし〉でいる証しとして、「動の行動」で生じる身体の〈感受性〉を〈わたし〉に受け入れさせるのと取って代わられることを示すがゆえに、〈わたし〉は〈思惟（する）〉にかかわらず、「動の行動」やそこからの〈感受性〉にて、〈存在する〉ことができるといえる。

だがまたヴェーユには、〈思惟する〉が不確かな能力と捉えられていたことも想起されると、〈思惟（知性）〉は棄て置かれるほかないのか。さすれば彼女が〈思惟と行動〉を強調したことはどう受け取られるかである。彼女がいうことでは、〈思惟〈知性〉〉は何らかの対象に対し、その何かを実現させるべき〈手段として役立つが、能動的としてしか何ものでもない<sup>(18)</sup>〉から、対象による〈心象〉を受容できないことが明白になる。だから〈思惟（知性）〉は不確かな、当てにならぬ能力でしかないと彼女に認めさせるのであろう。それは、〈思惟する〉が対象を〈能動的〉に認識でき、言語表現させ、対象への見定めまで繰返し行使されるにすぎないだけか、〈能動的〉であることは〈思惟〉を作り出すにあって、この世界（の対象）に依拠するかぎり、それ以外にはその支えをもたせられることがないからである。こうした支えは彼女にあっていわずと知れたこと、彼女がこの世界（の対象）を〈思惟する〉よりか、「動の行動」から生じた〈感受性〉によって、この世界より〈超越的な領域（あの世界）〉に一時的にでも参入し、あの世界の〈善（正義）〉に接し得たことに見出される、まさにこの〈善（正義）〉でなければならず、〈思惟する（能動）〉方はその〈思惟（受動）〉をして〈善（正義）〉のこの世界（の対象）への関連を知らしめることが必要になろう。つまりこの世界とあの世界を行き来した、彼女をはじめとする人間たちが、この世界を生きるにあって、あの世界でみた〈善（正義）〉を支えとしたことに倣えぬならば、〈わたしたち〉はせめて〈思惟する（知性）〉でこの世界（現実）での、あり得るべき〈善（正義）〉を実現せねばならぬのである<sup>(19)</sup>。

それゆえ工場体験以降での〈思惟と行動との関係〉たる〈活動〉においては、〈行動〉からする〈感受性〉のことがヴェーユにもっとも注視されることになる。〈感受性〉を除いて、この〈活動〉の真意の核心がどこにも見当たらなくなる。要は筆者には、〈感受性〉を取り上げずに、彼女が学士論文で語っていた〈認識論〉の整合性や一貫性すら確認させられないばかりか、この〈感受性〉のもとではじめて、〈思惟（する）〉との〈関係〉が活かされ、彼女（人間）は〈思惟と行動との関係〉たる〈活動〉での〈生の現実〉を生き抜き得ると結語できる。〈活動〉はまた〈労働〉の語に換言された。これが可能になったのは、〈活動（労働）〉が〈運動〉や〈能動〉とも理解されるし、〈活動（労働）〉とい



う、〈思惟と行動〉自体の各〈運動（能動）〉には、〈同一のことがら〉である〈受動〉としての〈思惟と感受性〉が含まれてくるからである。

ところが人は学士論文に〈思惟と行動〉の、一連の語の明記された箇所を確認できないというであろう。だがこれらと同意である語がそこに見出されると答え得る。つまり、ヴェーユが学士論文でデカルトを論じる以上、彼の唱える〈コギト〉における〈思惟（する）〉を、同時に彼女の思想を特色づける〈行動（感受性）〉をそれぞれ持ち出すは当然であるほか、すでにそこから引用文を掲げみたように、〈能動〉と同語にみなした〈労働〉や〈運動〉<sup>(20)</sup>の各語が多く散見することでは、彼女のこうした思想（認識論）はその後の工場体験直前での論稿と手紙から、工場体験を通して彼女の死まで、整合性や一貫性を保持し続けていたと断じおかなくてはなるまい。

ヴェーユに〈感受性〉が〈思惟〉以上に注視される能力と捉えられたことは、筆者にとって、彼女が既出引用文で〈この道具は、わたしの知的能力（すなわち思惟をもたらず能力）を広げながら、わたしに対して身体それ自身と同じ役割を演ずる〉<sup>(21)</sup>と述べていたことから明確となる。〈この道具〉とは学士論文の上記既出引用文によると、〈思惟〉と〈感受性〉をともに有するとされた〈その人体〉<sup>(22)</sup>の語に同意であった。そして〈その人体（les corps humains）〉は、工場体験直前での論稿や手紙に記された〈思惟と行動との関係〉に、上記既出引用文中の〈わたし〉と〈身体〉を重ね合わせ得るならば、学士論文時点では〈思惟〉に〈わたし〉を、〈行動〉に〈身体（その感受性）〉を適合させる〈関係〉を〈保持〉せずにおれない〈人体〉とみておくほかならう。

しかも〈わたし（思惟）と身体（その感受性）との関係〉にある〈その人体〉すなわち〈この道具〉は、〈わたし〉の〈思惟する〉〈能動〉と〈身体〉の〈運動（能動）〉のいずれもが何らかの対象（目途）の実現に向けて働きかける（使用される）にしても、〈思惟（する）〉〈知性〉はヴェーユに〈身体〉と関係しないといわせるからして、まずは〈わたしに対して身体それ自身と同じ役割を演ずる〉ことにならないし、それでいて彼女が工場体験で実際〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉に襲われては、その原因であった〈身体〉の〈感受性〉だけが〈わたし（魂）〉に〈関係〉するほかになく、要は〈わたしに対して身体それ自



身と同じ役割を演ずる)は〈感受性〉でしかなく、この〈感受性〉をして〈ピンセット〉<sup>(23)</sup>よりか、むしろ〈釘〉<sup>(24)</sup>たらしめるごとく、〈わたし(魂)〉に突き刺さらねばならなかったのである。

〈この道具〉は繰返すが、〈わたしに対して身体それ自身と同じ役割を演ずる〉とされる。そこで〈この道具〉すなわち〈その人体(〈わたし〉と〈身体〉)とをさしている人間的身体(les corps humains)〉は、かの〈身体構造〉を〈妨害〉して生じた、〈身体〉の〈感受性〉を〈わたし(魂)〉に運ばせたうえで、〈わたし〉の〈思惟する〉を不可能にする〈妨害〉をも惹起させた(に使用される)からには、〈わたし(魂)〉への直接的〈妨害〉は〈感受性〉なのであって、〈感受性〉たる〈妨害〉自体をば、〈わたしに対して身体それ自身と同じ役割〉にさせたと捉えられずに、いかなる能力を〈妨害〉という〈役割〉に当てるか、もはや〈感受性〉を除いて見当たらないわけである。それに〈この道具(その人体)〉を〈釘〉に見立てられるは、たとえば金槌を〈感受性〉にみなし、金槌(感受性)で〈釘の頭(身体)〉を打つ〈衝撃〉により、〈衝撃〉が〈釘の先き(わたし)〉の〈一点(わたしの中心)〉に伝えられるからである。こうした〈わたし(魂)〉における〈妨害〉は〈思惟(わたし)〉と行動(身体)との関係から、表面上〈思惟する〉ことができない証したる〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無(真空)〉の〈魂の破壊〉として表現されたほか、これらを現象させた、当の〈感受性〉をそのうえ〈感受性のなかの空無(真空)〉へと導く、さらなる〈魂の破壊〉をもたらさざるを得なくなるし、〈身体構造〉でのだけでなく、〈わたし(魂)〉での〈妨害〉もヴェーユ(人間)にとって、〈不幸〉であり、〈必然性〉でしかないと同時に、〈釘〉たる人工的〈道具〉の作用が〈必然性〉であるように、〈釘〉に宛がわれた、〈身体〉に発し、〈わたし〉の〈思惟〉を〈逃亡〉させ〈空無(真空)〉にする、自然的〈感受性〉すら〈必然性〉でなければならぬと読むことができる。

以上のことが何ゆえ〈必然性〉とされるかは、ヴェーユにいう〈地上の必然性は神の沈黙の響きである〉や〈自然は神の真理の鏡である〉<sup>(25)</sup>にかかわるからだといえども、ここはこれら引用文の説明を付すところではない。今は次のいくつかをみる方が先にくる。筆者は一に、例の(les corps humains)を〈(そ

の) 人体) または (人間的身体) と (直) 訳したとて、これには感覚諸器官や内臓などの身体部分が、さらに (わたし (魂)) を (脳) として表現するからして、身体部分に見立てることが含まれることを確認する。一に、何らかの対象に働きかける、(わたし (脳)) の (思惟する) は対象を (ときおり) しかいい当てぬ (妨害) に出会うほか、(わたし (脳)) に伝えられた身体の (感受性) によって (思惟する) ことができない (妨害) に追い込まれることを確認する。ただ (思惟する) (わたし (精神)) の機能が (脳) という身体部分にあるなかでその (思惟) すら生み出せなくする (妨害) は、身体の (感受性) が (身体 (構造) に妨害され) てもたらされる場合と同様に、(脳) なる (身体 (構造) に妨害される) (妨害) とみてかまわぬであろう。

**ヴェーユの哲学 (認識論) は实在論的か、それとも観念論的か、  
そうでなくば彼女はいかなる哲学をめざすのか**

しかし筆者が一に、上記での (思惟する) (わたし) を (魂 (âme)) とせず、(精神 (esprit)) としたはなぜかを、また一に、(知性) に関する (思惟する (能動)) とこの (思惟 (受動)) がその (妨害) 以外のことにあっても、とりわけ感覚諸器官や内臓などの身体に関係しないとしたはなぜかを探り出さなくては、「小見出し」の問いに答えをみることができないであろう。そこでどんな理由がこれらに充当するかを見出すに当たり、筆者はそれぞれにつき多少これまで触れおいたことを、ヴェーユからの引用文で補いつつ整理し、そのうえで彼女がたとえば、マルクスのような (实在論 (唯物論) 者) にも、デカルトの (真理の探求) におけるごとき (観念論者) にも与しないと、彼女の哲学はこうなると結語する。

その際以下に提示する、いくつかの引用文を糸口として、上記のことに答えを求めることにする。

Nous commencerons par étudier l'influence du corps sur l'âme. <sup>(26)</sup>

魂 (âme) に対する身体の影響を検討してみよう。

La partie du corps sur laquelle l'esprit agit, l'action qu'opère l'esprit sur le corps, C'est la seule chose claire.<sup>(27)</sup>

精神 (esprit) が身体部分に影響を及ぼし、精神 (esprit) が身体に行動を生じさせるは明らかなことである。

二引用文は、〈魂〉や〈精神〉の各語と各求心的、遠心的伝達の違いを有するが、それでもこの〈魂〉や〈精神〉のいずれをも〈わたし〉に換言させ得るにちがいなкаろう。なぜなら最初の、命令をあらわす引用文と、後段に記す、註(30)の引用文からは、〈魂〉や〈精神〉がそれぞれ〈わたし(たち)〉をさすと予想されるからである。とまれ上記二引用文は、ヴェーユが工場体験前に教鞭を取っていたなかで、女生徒レノーによってまとめられた『ノート(哲学講義)』からの各文章にしる、これだけで〈わたし〉が〈魂〉になり、〈精神〉であるは何ゆえかを明かせずば、今指摘したような、さらなる引用文を用いてでも質しおかねばならぬであろう。

『哲学講義』には以上のほか、〈les rapports de l'esprit et du corps (精神と身体との関係)〉<sup>(28)</sup> や 〈les rapports de l'âme et du corps (魂と身体との関係)〉<sup>(29)</sup> の各語句も記されることで、筆者はヴェーユの〈認識論〉の出発点を成すとみた学士論文(1930年)から、この『哲学講義』(1933年)を含め、工場体験直前に書いたとされる論稿『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』(1934年)まで、彼女にあって〈魂〉や〈精神〉のことすら整合一貫させた各思想にとどまらせるだけか、それとも工場体験以降終生その変わらぬ各思想であるかを証さねばならなくなる。これをも導き出そうとすることは、〈わたし〉が〈魂〉や〈精神〉と表記されるいずれかを何によって区別し、そこから〈わたし〉がどう捉えられるべきかにかかわるのであり、何はともあれ、それらに答えることなのである。まずは学士論文から、この一を聞き出せる文章が引用される。

L'impulsion de l'esprit est ainsi coulée, non uniquement dans le moule immuable de ce premier outil qui m'est joint, mon corps, mais en plus dans le moule des outils proprement dits, dont la structure n'est immuable qu'autant qu'il me plaît. <sup>(30)</sup>

精神（esprit）（から）の刺激はだから、わたしに結合される最初の道具の、すなわちわたしの身体の不変の鋳型のなかに流し込まれるだけでなく、身体構造がわたしに気に入るのみでしか不変でない、本来の意味での道具の鋳型のなかにも流し込まれる。

〈精神（から）の刺激〉とは何か。筆者はこの〈刺激〉をもとより、デカルトのいう〈思惟する〉と解する。〈思惟する〉が〈疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた想像し、感じるものである〉ことは、かつかかる〈もの〉がかかる〈わたし〉であったことはすでに触れた通りである <sup>(31)</sup>。かかる〈思惟する〉こと、すなわち〈わたし〉たることを一応支持するとみられるヴェーユの引用文の〈わたし〉からして、〈わたし〉は彼のいう〈真理の探求〉の〈わたし〉と同様に、〈精神〉となるのであり、〈精神（わたし）〉の遠心的働きによっては、彼女の上記引用文に語られるように、〈精神（わたし）と身体との関係〉があるといえるわけである（ただし両者のいう〈精神（わたし）〉の捉え方が同じでないことは後述する）。彼女の場合、問題は彼のいう〈思惟する〉各能力（疑うや理解するなど）がすべて身体に関係するか否かを確かめることにある。これを知るべく、例の論稿が参照される。

Une ombre impénétrable enveloppera toujours le rapport immédiat qui lie nos pensées à nos mouvements. <sup>(32)</sup>

わたしたちの思惟をわたしたちの身体運動に結びつける直接的関係は、たえず不可解な闇に包まれるであろう。

Parfois les réactions du corps vivant sont complètement étrangères à la pensée;

parfois, mais rarement, elles en exécutent simplement les ordres; plus souvent elles accomplissent ce que l'âme a désiré sans que celle-ci y prenne aucune part; souvent aussi elles accompagnent les vœux formés par l'âme sans y correspondre d'aucune manière; d'autres fois encore elles précèdent les pensées.<sup>(33)</sup>

運動する身体の反応はときおり、思惟とは完全に無関係である。ときおり、だがまれに、思惟の命令をたんに実行する。運動する身体の反応はより頻繁に、魂の望んだことを、魂がまったくそれに関心を持つことなしに遂行する。また頻繁に、魂でつくられた願望に、少しも適合することなしに付随する。運動する身体の反応はさらに、思惟に先行する。

上記した二引用文のうち、最初は〈思惟〉が〈わたし（たち）〉に属することを、他方は〈思惟する〉に関連して語られもするのが〈魂〉であることを、したがって両引用文からも、これまでに語ってきたのと同様に、〈わたし〉が〈精神〉や〈魂〉としてあらわされることを証明する。ここで〈魂〉での〈思惟する〉ことを述べるはともかく、ヴェーユがもっぱら〈思惟〉とだけ記す、当の〈思惟〉は何かを今一度確かめおく必要がある。当の〈思惟〉には〈能動〉の〈思惟する〉と、この働きからもたらされる〈受動〉の〈思惟〉（これも後述に譲る）が含まれたし、筆者が先きに〈精神（から）の刺激（思惟する）〉と書いたあとに、同時に添えた、デカルトのいう〈思惟する〉に対し、彼女はあくまで〈知性（理性）〉に依拠する、〈疑い、理解し〉から〈意志し、意志しない〉までの各〈思惟する〉を取り上げ、自らのみる〈思惟する〉に相当させたことにある。この〈知性（理性）〉での〈思惟する〉は筆者にとって、まさに頭（脳（身体））を使い、手振り身振りも混えた動きである「静の行動」以外ではなかったのである。

さらにこの〈思惟（する）〉をヴェーユのいう、例の〈思惟と行動〉の語句中の〈思惟〉によっても、明かすことができる。例の語句は〈能動〉をさす語〈行動〉と、一方の語〈思惟〉とが等位に並ぶのだから、〈思惟〉も〈行動〉と同意でなければならなくなる。すると当然、〈思惟〉は他方で〈受動〉の意を持

ち合わせたとはいえ、実は〈行動〉すなわち〈知性（理性）〉による〈思惟する〉という〈能動〉でさえある。まさにデカルトにいう〈能動と受動はつねに同一のことがらである通りなのだ。だから〈思惟〉は〈思惟する〉「静の行動」に与すがゆえに、〈思惟する〉を含意させられずにおれないわけである。しかしてかの〈思惟の逃亡〉も〈思惟する〉ができないうえでの〈逃亡〉の意であって、この〈能動（静の行動）〉の働きなくば、〈思惟（受動）〉は生じてこないはずである。

その〈思惟と行動〉の語句から、筆者はこれを〈精神と身体〉に、また〈思惟と行動との関係〉という表現を〈精神と身体との関係〉のそれに結びつけてみることができる。しかもこれらの語句の意味するところは同じなのであると。つまり〈思惟〉は〈精神〉に、〈行動〉は〈身体〉に等しく置き換えられる。すると〈思惟（精神）と行動（身体）との関係〉はどうなるといえるのか。まずは〈思惟（精神）〉を〈思惟する〉ところに見立てるのみか、〈身体〉とみなしおく場合である。筆者は〈思惟する〉が〈精神〉すなわち〈脳〉という〈身体〉で可能になり、〈脳（身体）〉を〈能動〉として〈行動〉させると指摘してきたのだから、上記での〈関係〉はヴェーユにあって、成立せざるを得なくなる。そして〈精神（思惟する）〉と〈精神（脳）〉以外の〈身体〉との場合である。ここでいう〈思惟する〉は〈知性（理性）〉に依存する能力であった。だから彼女は〈精神が身体部分に影響を及ぼし、精神が身体に行動を生じさせる〉と説いたように、〈知性（理性）〉による〈思惟する〉〈行動（能動）〉をもって、この〈精神〉は〈精神（脳）〉以外の〈身体〉に〈影響を及ぼす〉とみたまは確かなのである。

だが同時に、筆者はヴェーユが〈精神（思惟する）〉と〈精神（脳）〉以外の〈身体との関係〉を〈たえず不可解な闇に包むと述べたり、〈運動する身体〉の反応はときおり、思惟（する）とは完全に無関係である〉と記したりすることに注意せずにおれない。上記前者の語句と同じ引用文中の〈mouvements〉を〈身体運動〉と訳した関連で、後者の文章の〈corps vivant〉を〈運動する身体〉と表記する、この〈身体〉は彼女に、〈ときおり、だがまれに、思惟（する）の命令をたんに実行する〉や〈思惟（する）に先行する〉ごとく〈反応〉すると

語られるからして、〈身体〉のこうした〈反応〉にすぎないゆえに、〈精神〉と〈精神（脳）〉以外の〈身体との関係〉は〈闇〉や〈無関係〉になるか否かを以下にて明確にする必要がある。

そのための確認事項は一に、前段の引用文中の〈思惟〉に括弧が付された理由を示すことにある。ここでの〈思惟〉をはじめ、かの〈感覚〉や〈感受性〉などの、ヴェーユのいう諸能力のほぼすべてがかかる各語、要は各〈受動〉用の語としてあらわされるようにみえることは、彼女にしる、デカルトにしる、彼らが諸能力の各〈能動と受動は同一のことがらである〉ことを認めないでは、〈思惟する〉や〈感じる〉という〈能動〉ばかりか、そのかかる各語の〈受動〉すら持ち出せなかったと読むことができる。たとえば〈思惟の命令〉との表記は何を語るか。〈命令〉は〈思惟する〉ことで発せられるのではないか。かつ〈命令〉自体は〈命令（思惟）する人の、そうした内容たる〈思惟〉ではないか。だから諸能力のうち、なかでも括弧付きにした〈思惟（する）〉は二通りを、つまり〈思惟する（能動）〉とその〈思惟（受動）〉とを含む表記にちがいないのだ（ただし〈思惟（受動）〉が彼女に問われたにしても、〈精神（脳）〉にもたらされない能力となることは前記した通り、次号に譲らねばならない）。

だが一に、ヴェーユの表記する〈思惟〉になぜ〈思惟する〉も含まれるのか、彼女の言で明かしおく必要がある。それは、彼女に〈知性（理性）〉は〈手段として役立つが、能動的としてしか何のものでもない〉と語られる、〈能動的〉なる語から予想されるだけでなしに、〈知性（理性）〉による〈能動的〉能力とはいわずもがな、〈思惟する〉（前記した例の諸）能力以外になく、〈思惟する〉を織り込ませて〈思惟〉という表記が可能になったからにはほかならない。この〈思惟する〉が〈精神（脳）〉と呼ばれるところで〈能動的〉に働くからして、〈精神（思惟する）〉が身体部分に影響を及ぼす〈反応〉をみせる（身体部分から見ると、〈反応〉は〈身体の反応〉となって捉えられる）は当然であるが、しかし〈反応〉には〈思惟する〉がかかわるにしる、その〈思惟する（精神）〉は〈精神（脳）〉以外の〈身体〉に対する〈反応〉をして両者を〈直接的関係〉に結合させはしないことを明らかにする。なぜならここにいる〈反応〉は〈精神（思惟する）〉がかかる〈身体〉にあらわれる現象にすぎない、要するに〈身体〉を



〈運動（機能）〉させたところに起因するのではない、ましてやそれ（反応）自身を〈思惟する（能動）〉からの〈思惟（受動）〉に見出すこともできないからである。そこから〈思惟〉なる表記に〈思惟する〉を欠いてはならぬし、〈思惟する〉自体が〈反応〉すると認められども、その〈反応〉をもって、〈精神と身体との関係〉が〈直接的関係〉にあると断じてはならないのである。

それに繰返し指摘せざるを得ない一に、〈思惟する〉ことで、〈つねにわたしが欲する（意志する）ところへ、ときおりわたしを連れて行くことであり、わたしはこの妨害を捨て去って別の妨害と替えることができない〉〈妨害〉があった。これはいかに〈精神（わたし）が身体に行動を生じさせる〉にあっても、その〈行動（思惟（意志）する能動）〉がすでに〈妨害〉を〈精神〉すなわち〈脳（身体）〉内で受けたうえて、〈精神（脳）〉以外の〈身体〉に〈反応〉することを、換言すると〈わたし（精神）〉が発する当（初）の〈思惟（意志）する〉とは相違する、いわば〈妨害〉的〈思惟（意志）する〉ことでもって、〈精神（脳）〉以外の〈身体〉に〈反応〉することを含意させる。要は〈精神（脳）〉や〈精神（脳）〉以外の〈身体〉でも、〈わたし（精神）〉から働きかける、当（初）の、全き〈思惟（意志）する〉ことはたえず〈妨害〉に立ち会う、その〈反応〉にしかなり得ず、しかもこのことは〈思惟（意志）する〉〈知性（理性）〉にとって〈必然性〉とみなされるわけである。したがってここからも、例の〈精神と身体との関係〉が〈精神（思惟する）〉でもって〈直接的関係〉を成すとはみえてこない。そのうえ上記引用文中の〈思惟する〉ことでの〈妨害を捨て去って別の妨害と替えることができない〉とヴェーユが記したことでは、これが工場体験以前の言であるからして、およそ全き〈思惟する〉ことの成果をみるまでは、その行使に専心し、（先きに触れおいた）〈別の（感受性による）妨害と替え〉てはならないという、彼女の主張に聞こえども、工場体験からは、彼女（わたし）は〈この妨害〉をかかへ〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空虚（真空）〉によって〈何ものでもな〉くさせ、〈わたし（魂）〉を〈別の妨害〉へと〈替え〉さずにおかなくするのだから、〈精神と身体との関係〉は完全に不成立になるほかないといえるのである。

そして一に、前段の引用文と同じ学士論文で、ヴェーユが〈精神（から）の

刺激（思惟する）を〈最初の道具の、すなわちわたしの身体の不変の鑄型のなかに流し込〉むと記すことは、〈精神（思惟する）〉が〈最初〉に〈流し込まれ〉よう、〈精神（脳）〉以外の〈身体部分（道具）に影響を及ぼす〉と書かれたことと同意か否かである。いずれかは〈鑄型〉の語が鍵となる。〈鑄型〉が複製物をつくる型をさすとすれば、〈身体部分〉の型とはたとえば〈思惟する〉を伝えたり、流したりする、神経細胞（線維）や血管の各枠に見立てられるし、各枠中に当初からすると、複製物なる本物ではない〈思惟する〉を伝え流すのだから、その〈反応〉は神経細胞（線維）や血管で〈妨害〉に出会うことを含ませてこよう。神経を例にいうと、そこに伝達される〈思惟する〉にとって、「閾値」<sup>(34)</sup>を越えられない〈反応〉もあるからである。〈反応〉はだからか、〈精神〉から伝えられ流れる、当初の〈思惟する〉ままであり、この全きそれであるとはかぎらなくなる。そこで〈反応〉は〈身体構造がわたしに気に入る〉まで、要は当初の〈思惟する〉を深め展開させるように、次々と働かせ合理に導くまで、〈不変〉ではなくなるとともに、こうした〈反応〉を受け入れるのが〈思惟する〉における、〈本来の意味での〉〈身体（構造）〉であると注釈できる。

このような〈精神（思惟）と身体（行動）との関係〉から、筆者は〈精神（思惟）〉を〈思惟する〉に受け直したうえで、その〈能動（行動）〉の場が〈精神〉すなわち〈脳（身体）〉にあるとみなすがゆえに、〈精神（思惟）と身体（行動）と〉を〈関係〉させずにおかないと、しかし〈精神（脳）〉を除く〈身体〉において、遠心的に伝わる〈精神（思惟する）〉をして即〈身体〉に対応させるようには〈関係〉せしめないと読んだ。だからヴェーユにあって、この〈精神（思惟する）〉は〈精神（脳）〉以外の〈身体〉に〈関係〉しないと断じてきた。さらに彼女のいう、〈知性（理性）〉による〈思惟する〉は、デカルトの〈真理の探求〉での〈思惟する〉と同じく、〈身体〉で生み出されはしないからして、当然〈思惟する〉が〈身体〉から〈精神〉へと求心的に伝達されることはない。したがって〈思惟する〉ことでの〈精神と身体との関係〉は〈精神〉を〈脳（身体）〉とみる〈関係〉では成立するが、〈精神（脳）〉以外の〈身体〉への、また〈身体〉の〈精神（脳）〉への〈関係〉では不成立にとどまらせる。要は不成立の場合、〈知性（理性）〉でもって〈心身合一〉が成るとはいえなく

なる。〈知性（理性）〉に依拠せずに〈心身合一〉を問おうとすれば、それは彼女が『哲学講義』に〈精神と身体との関係〉と同時に記した、〈魂と身体との関係〉として捉えるほかないのであって、彼女はこの〈関係〉を工場体験で体感せざるを得なくなるにちがいない。

とまれ、今度は工場体験直前での、ヴェーユのかの論稿や手紙に書かれていた〈思惟と行動〉の、ならびに『哲学講義』に記された〈精神と身体（との関係）〉の語〈思惟（精神）〉を〈思惟する（能動）〉にではなく、〈思惟（受動）〉に置き換えるならば、そこに何が語られるかを質しおかねばならぬであろう。これに答えるに、筆者は、前段で〈思惟する〉が〈精神（脳）〉以外の〈身体〉に〈関係〉しないと述べたのだから、その〈身体〉に〈思惟（受動）〉が生み出されるは不可能であると、そればかりか〈思惟（受動）〉が〈精神（脳）〉にすら生じることはないといわざるを得ない。なぜなら彼女に、〈知性（理性）〉による〈思惟する〉が『哲学講義』で〈能動的としてしか何ものでもない〉と語られたことは、この〈思惟する〉〈能動と受動は同一のことがらである〉とみえるにもかかわらず、〈知性（理性）〉の働きが〈能動〉のほかにはないことを示唆させるがゆえに、彼女をしてその〈思惟（受動）〉を問わせたりも、これが〈精神（脳）〉以外の〈身体〉の、ましてや〈精神（脳）〉のいずこにも見出されたりもしなくなると捉えられるからである。こうして、〈精神（脳）〉以外の〈身体〉がそれ自身で〈思惟する（能動）〉ことやその〈思惟（受動）〉を可能にしない、したがって〈知性（理性）〉すなわち〈思惟（する）〉は〈身体〉に〈関係〉しないと、また〈思惟する（能動）〉が機能する場を〈精神（脳）〉と見立てても、その〈思惟（受動）〉は〈精神（脳）〉すなわち〈身体〉にもたらされないとは、そして彼女が工場体験以前の『哲学講義』のなかで、例の〈思惟する〉〈能動〉のことを主張していたのに、工場体験での〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉の現実から、この〈思惟する（能動）〉が不可能になったのだから、当然その〈思惟（受動）〉すら問題外になるとは、すでに触れた通りなのである。

〔続〕

註

- (1) 前号とは、拙論『ヴェーユ身体論』（新潟大学人文学部人文科学研究，第120輯，2007年）をさす。筆者はこれをまた、連載稿『ヴェーユとマルクス』の④に充当させる。
- (2) 上記前号の註(23) P.45と本文 P.46参照
- (3) Simone WEIL 《Oppression et liberté》(Gallimard) 中の《Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale》 P.115
- (4) Ibid., P.159 (本文の訳文中の括弧内の「前記して」の「前記」とは、たとえば本文註(3)を該当させ得る)
- (5) Simone WEIL 《La condition ouvrière》(Gallimard) 中の《Lettre à une élève》 P.25
- (6) Ibid., P.25 〈Il y a des gens qui n'ont vécu que de sensations et pour les sensations; André Gide en est un exemple. (感覚によって、感覚のためだけに生きた人たちがいる。アンドレ・ジイドがその一例である)〉
- (7) 拙論『ヴェーユとマルクス③』（新潟大学言語文化研究，第12号，2007年） P.4 註(9)参照
- (8) Simone WEIL 《Oppression et liberté》(Gallimard) 中の《Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale》 P.117〈... ne pouvoir rien obtenir sans avoir mis en action, ... toutes les puissances de la pensée et du corps... 〉
- (9) 拙論『ヴェーユ身体論』（新潟大学人文学部人文科学研究，第120輯，2007年）参照
- (10) Ibid., 註(21) P.43, 註(23) P.45
- (11) Ibid., 註(23) P.45
- (12) Ibid., 註(5) P.30
- (13) Ibid., 註(23) P.45
- (14) 本稿註(13)ならびにこれ以下からこの段落終わりまで参照
- (15) 本稿註(5)参照
- (16) 拙論『ヴェーユとマルクス③』註(1) P.1 参照（そこには〈わたしの思惟は全知全能の力を有していない〉と記されるが、これはデカルトが〈真理の探求〉での〈感覚〉能力に対し〈信用しない〉と語ったことに真似ていうと、ヴェーユのみる〈思惟（知性）〉の方こそ当てにならぬ、〈信用しない〉能力に相当す

ることを含意させてくる)

- (17) Simone WEIL《La pesanteur et la grâce》(Plon)P.133《L'intelligence ne peut jamais pénétrer le mystère.》
- (18) 拙論『ヴェーユとマルクス③』註(2)P.1 参照
- (19) 第二次世界大戦中の、ナチスによるフランス占領下において、ロンドンでレジスタンスの指揮を取った亡命政権「自由フランス」の軍人、政治家ド・ゴールに報告書として提出されるが、それでも彼に受け入れてもらえなかった、かの『根をもつこと』の、すなわち戦後フランスの、もしやマルクス主義をも乗り越えんとする社会建設を〈思惟〉し描かせた建白書は、推察するに、ヴェーユがあの世界の〈善(正義)〉をみればこそ、実現された、当の証しとなり、彼女の「静の行動」で成ることであった。
- (20) Simone WEIL《Sur la science》(Gallimard)中の《Science et perception dans DESCARTES》P.P.77-81(この頁間にとくに〈mouvement(運動)〉の語が記される)参照
- (21) 拙論『ヴェーユ身体論』(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年)註(23)P.45参照
- (22) Ibid., 註(23)P.45 参照
- (23) 拙論『ヴェーユとマルクス②』(新潟大学人文学部人文科学研究, 第119輯, 2006年)註(4)P.P.75-76, またはP.P.79-80 参照
- (24) 拙論『ヴェーユとマルクス③』(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年)註(25)P.11, また註(39)P.16, 註欄P.19 参照
- (25) 拙論『ヴェーユとマルクス②』(新潟大学人文学部人文科学研究, 第119輯, 2006年)註(11), 註(12)P.81(また拙論『ヴェーユとマルクス③』)(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年, 註(26)P.11)参照
- (26) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT《Leçons de philosophie par Simone WEIL》(Plon) P.21
- (27) Ibid., P.111
- (28) Ibid., P.229
- (29) Ibid., P.229
- (30) Simone WEIL《Sur la science》(Gallimard)中の《Science et perception dans DESCARTES》P.88(この引用文は既出の拙論『ヴェーユ身体論』註(23)P.45中の、二番目の省略記号〈...〉の箇所挿入される文章である)参照

- (31) 拙論『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔IV〕』（新潟大学人文学部人文科学研究，第108輯，2002年）註（2）P.1 参照
- (32) Simone WEIL《Oppression et liberté》（Gallimard）中の《Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale》P.120
- (33) Ibid., P.120
- (34) 拙論『感受性試論〔V〕』（新潟大学教養部研究紀要，第21集，1990年）註（9）P.7，註（51）P.26（註欄P.P.33-34）参照